

明日香村飛鳥京跡第151次調査 — 内郭中枢の調査 —

現地説明会資料(2004年3月13日)

調査機関	奈良県立橿原考古学研究所
所在地	高市郡明日香村岡
調査期間	平成15年11月12日～現在調査中
調査原因	学術調査
調査面積	600㎡(平米)
主な遺構	後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮の大型建物と石敷広場、池など
主な遺物	須恵器、土師器など
現地説明会	2004年3月13日(土)に実施

1. はじめに

飛鳥京跡は明日香村岡に位置する宮殿遺跡です。1959年からはじまった発掘調査により、大まかに3時期の遺構が重なって存在していることがわかりました。下層からⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期遺構と呼んでいます。そして、出土した土器や木簡の年代などからⅢ期は斉明・天智の後飛鳥岡本宮(656～)と天武・持統の飛鳥浄御原宮(672～694)であることがほぼ確定し、Ⅰ期が舒明の飛鳥岡本宮(630～)、Ⅱ期が皇極の飛鳥板蓋宮(643～)である可能性がいられています。

今回の発掘調査は、Ⅲ期(後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮)の宮中枢の建物配置の解明、ならびに、その下層にあるⅡ期(飛鳥板蓋宮)、Ⅰ期の構造解明を目的に、平成15年11月から実施しています。調査対象面積は約600㎡です。

ところで、Ⅲ期は内郭とエビノコ郭とから構成されます。内郭だけの段階が後飛鳥岡本宮、内郭にエビノコ郭が付加され外郭が整備されたのが飛鳥浄御原宮と考えられます。大まかにみて、内郭は内裏、エビノコ郭は大極殿に相当する施設と考えられます。研究所では1979～80年に内郭南門と内郭前殿の調査をしています。今回の調査区はそのすぐ北にあたります。

2. 発掘調査の成果

今回の調査では建物と石組溝、石敷広場、池、塀を検出しました。すべてⅢ期に伴うものと考えられます。

建物は調査区の北東で検出しました。今回の調査では建物の南西部分1/4だけを調査しました。東西4間以上、南北2間以上の非常に大きな建物です。南には庇をもち、建物の周囲を石敷がめぐります。西に床が張り出していた形跡(縁)があります。建物のすぐ南をとる東西方向の石組溝を雨落溝としています。また、建物の西妻から2間目に階段を取り付けた痕跡が確認できました。建物は階段の張り出しから推定すると、床の高さが2m前後の高床の建物とすることができます。

建物の南正面には、南北約12mの石敷広場がひろがっています。わずかに石が抜き取られたところがあるほかは、ほぼ完全なかたちで石敷が残っていました。石敷は基本的に人頭大の石を敷きつめたものですが、よくみると、石の目地の通るところや小振りの石を方形に敷きつめ

たところ、小振りの石を部分的に敷いているところなどがあります。それぞれ石を敷いたときの単位、改修痕跡である可能性があります。

建物の西では、砂利を丁寧に敷いた池の跡がみつかりました。南辺を東西の石組溝、東辺を南北の石組溝によって区画されたもので、北西や西に蛇行状にのびる窪みに州浜のように砂利が敷かれています。また、各所に人頭大の石を配しています。さらに、北西や西にのびていく可能性があります。建物にみられた西への床の張り出しは、この池との関係で理解できるのではないのでしょうか。池は建物とほぼ同時につくられ、建物よりは早く埋め立てられています。

石敷広場の南辺で、東西方向の塀を3条検出しました。内郭前殿のある南区画を分ける施設とみてよいと思います。北にある建物をより厳重に護るための施設と考えられます。しかし、今回の調査では南区画と北区画をつなぐ門のような施設は確認することはできませんでした。

今回の調査では、Ⅱ期(飛鳥板蓋宮)、Ⅰ期の構造説明も一つの目的でしたが、Ⅲ期の石敷の残りが良好であったため、十分な調査をすることはできませんでした。しかし、石敷の石が抜かれているところでⅠ期の柱穴を検出しています。

3. まとめ

今回の調査では、Ⅲ期(後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮)にあたる巨大な建物とその南にひろがる石敷広場を検出することができました。建物は南西部分1/4だけを確認したにとどまりますが、仮に内郭の南北の中心軸で折り返すと、東西8間(24m)という巨大な建物となります。すぐ南でみついている内郭前殿は東西7間ですから、それよりも大きいということになります。建物の正確な南北規模は、来年度の調査を待たねばなりません、3間ないしは4間とみるのが妥当です。また、南に庇をもつことから、今回検出し建物を内郭北区画にある正殿級の建物とみてほぼまちがいはありません。また、石敷広場は南北約12mと内郭前殿の前の広場とほぼ同じ規模です。内郭前殿と今回みつかった区画が、計画的につくられていることがわかります。石敷広場の南辺では塀を3条検出しました。これも、今回の調査でみつかった建物と石敷広場を厳重に区画するためと考えることができます。こういったことから、建物は内郭北区画のなかでも、きわめて神聖かつ重要なもの、すなわち、天皇(大王)にかかわる正殿である可能性がきわめて高いと考えられます。

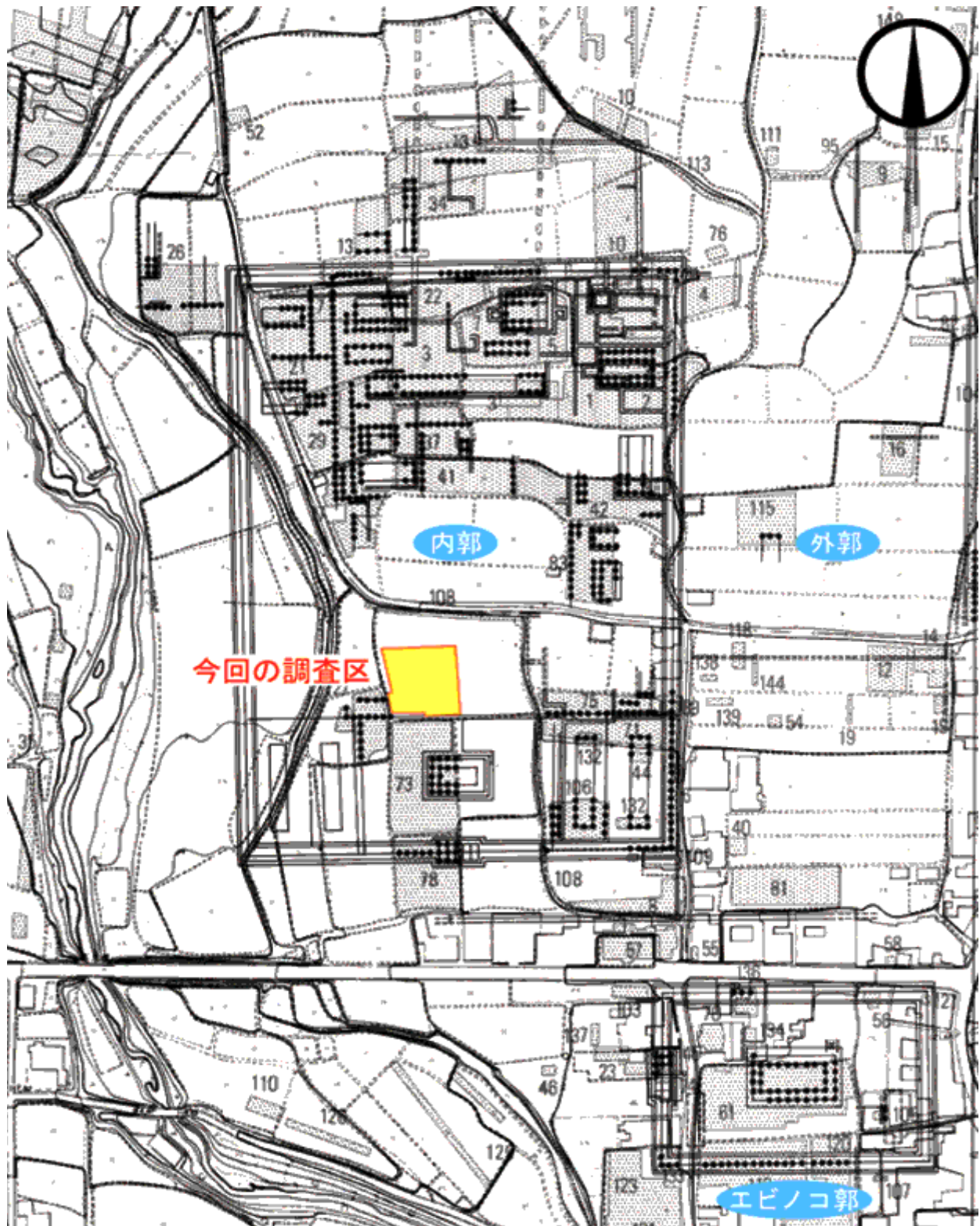
さらに、建物の西から砂利を敷いた池がみつかりました。このような池は吉野離宮といわれている宮滝遺跡でみつっていますが、宮の正殿級の建物に隣接してみつかるのははじめてです。州浜状に砂利を敷いているなど、これまでの飛鳥時代の庭園としては類例のないものです。それが、また、天皇(大王)の私的空間の正殿に隣接してみつかったことから、天皇(大王)の私的空間の形態や当時の王権の形態を考えるうえでも重要な問題を提起するものと思われます。

今回の調査は、建物の規模の確定や池の性格の究明などになお課題が残りましたが、今後の調査の進展に大きな期待がもてる調査となりました。なお、この調査は、飛鳥正宮の学術調査事業にもとづいて実施したものです。



第1図 遺跡周辺地形図

「国土地理院発行 1/25,000 地形図（畷傍山）を使用」



第2図 調査区位置図
1/2,000 飛鳥京跡調査位置図



写真1 飛鳥全景(南東上空から)



写真2 調査区全景(上空から)

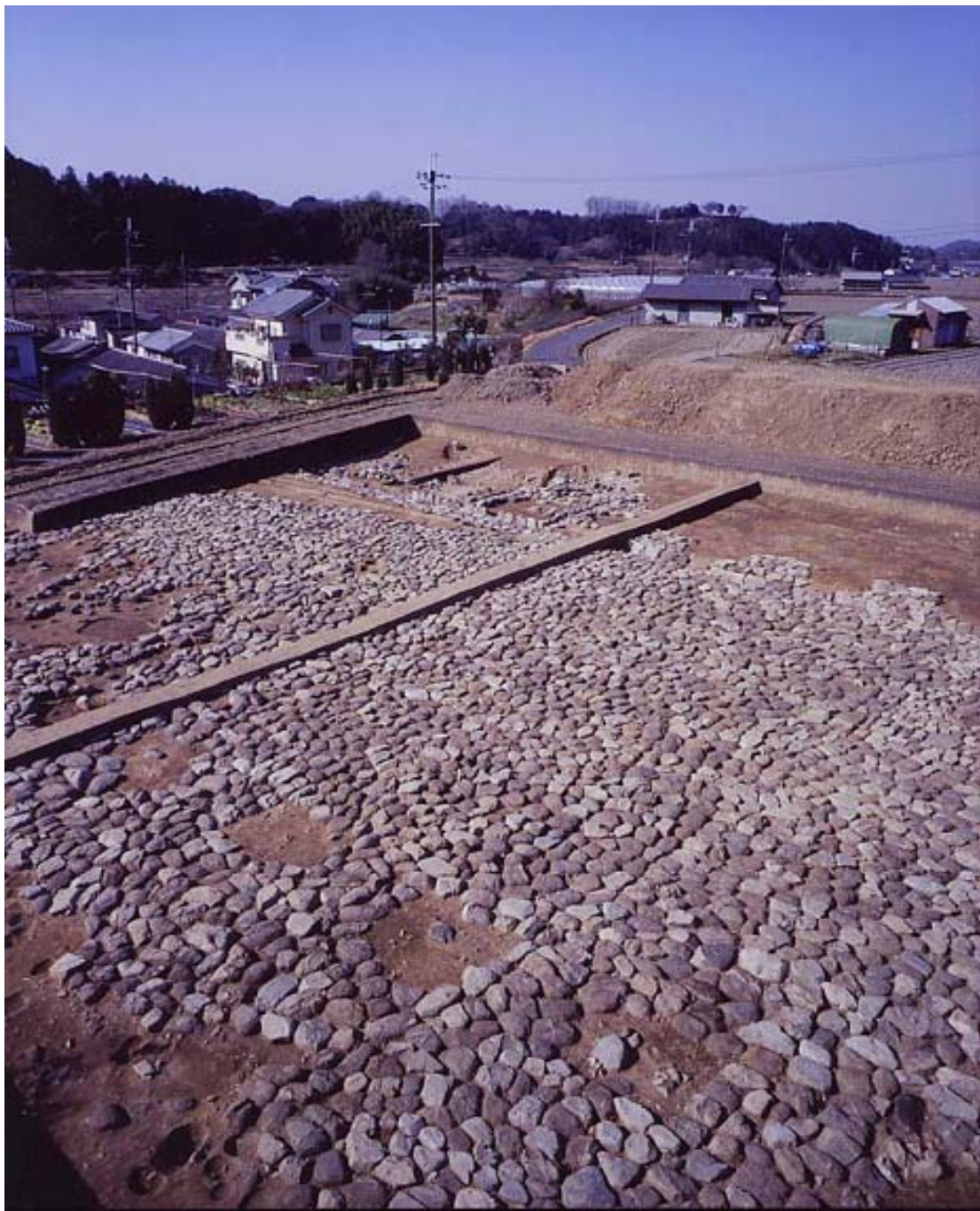


写真3 調査区近景(南東から)



写真4 大型建物跡(東から)



写真5 池(西から)



写真6 東西方向の石組溝(西から)



写真7 塀(東から)

本資料は、奈良県立橿原考古学研究所調査2課林部 均・南部裕樹・北中恭裕が作成した。